

小学生の母親による子どもへの苛立ち感情の特徴 とその関連要因の検討

—日常生活の文脈に即して起こる苛立ちに着目して—

中京大学心理学部 小島 康生^{注1}
元 中京大学心理学部 古澤 頼雄
中京大学心理学部 永田 法子
大妻女子大学 深津千賀子

Context-dependent negative feelings of mothers toward their school-aged children and related factors

KOJIMA, Yasuo (School of Psychology, Chukyo University)

KOSAWA, Yorio

NAGATA, Noriko (School of Psychology, Chukyo University)

FUKATSU, Chikako (Faculty of Human Relations, Otsuma Women's University)

This study examined the context-dependent negative feelings (e.g., anger, irritation, constraint) of mothers toward their school-aged children and the backgrounds of these feelings. Self-report questionnaires were administered to a total of 383 Japanese mothers of 6- to 10-year-old school-aged children from intact families. The questionnaires included a scale on context-based negative feelings toward children extracted from preliminary explorations of semistructured interviews, as well as other scales evaluating factors such as daily life and feelings toward role as childcare provider. Principal component factor analyses with promax rotation revealed three factors associated with the contexts in which mothers felt negative feelings toward their children: (1) when the mothers have personal problems (e.g., poor health, business-related problems, marital discord); (2) when the children display immature or dependent behaviors; and (3) when the mothers have unacceptable feelings toward their children's attitudes. Cluster analyses of the scores on the evaluations of daily life and feelings toward role as childcare provider identified three distinct groups of mothers. Two-way analyses of variance, using these groups and the children's birth order as independent variables, were performed to clarify the factors underlying mothers' negative feelings toward their children. For mothers with only one child, the results revealed that those in the group who felt more isolated, found less fulfillment in their daily lives, reported less support from their husbands, and felt more restricted in their role as childcare provider more frequently felt negative feelings toward their children in a wide variety of contexts. For mothers with two children, the effects of birth order were salient for mothers with male children, whereas interactions of birth order with the grouping identified by cluster analyses were identified for mothers with female children. Finally, for mothers with three children, the effects of birth order were significant regardless of the children's sex. Overall, mothers with multiple children seemed to harbor negative feelings toward their firstborn children more frequently than toward their other children. One possible explanation is that mothers might have developmentally unrealistic expectations of their firstborn children to be autonomous and exhibit more self-care behaviors because the mother's attention must be devoted to younger children. After finding that they must continue to monitor their older children's immature behaviors, mothers might become more likely to develop negative feelings toward their firstborn children.

Key words: mothers, context-dependent negative feelings, children's birth order, questionnaire

注1 ykajima@lets.chukyo-u.ac.jp

問題と目的

1. 子育てに伴う否定的な育児感情

わが国の近年の発達心理学においては、子どもを持つ親の心理に迫ろうとする研究が主要なテーマのひとつと認識されている（柏木，2001）。子どもを育てることには大きな喜びがある反面、いろいろな意味において辛く大変な経験であることも事実で、このことは多くの親が経験的に感じていることであるのと同時に、実証的なデータにおいてもそれが確かめられている（浅川・鎌田・横川ら，1999；柏木・若松，1994；野澤，1989）。そして、子育てとは本来的には、「大変だが喜びもひとしお」、「楽しいが、でも大変」といった両価的な感情の揺れ動きの積み重ねなのだといっても差し支えなからう。

だが、研究ベースにおいて取り上げられることが多いのは、国内外を問わず圧倒的に子どもを育てることに伴う負の側面、すなわち子ども本人や子どものいる生活、あるいは子どもを育てるいまの自分が抱える否定的な感情にかかわる問題である（日本：荒牧・無藤，2008；海老原・秦野，2004；中嶋・齋藤・岡田，1999；菅野・岡本・青木ら，2009，アメリカ：Crnic & Greenberg，1990；Deater-Deckard，Smith，Ivy，& Petrill，2005，香港：Lam，1999など）。いわゆる、そうした否定的な育児感情に研究者や実践家が注目せざるを得ない理由のひとつは、その延長線上に虐待のような深刻な問題が横たわっている可能性が考えられるからであり、実態の把握、あるいはその背景要因の解明を通じて、具体的な支援策を講じることが急務の課題なのだとと言える。

またいっぽうで、日本のみならず多数の先進国に共通する少子化の問題とも、この否定的な育児感情は強い接点がある。虐待をはじめ子育てにかかわる負の側面はマスコミ等でもたびたび取り上げられ、子どもを育てることに伴う「苦しみ」や「大変さ」が実際以上に、また事実とはややかけ離れた形でわれわれの目に飛び込んでくることも多い。歴史的にみれば、ある時期を境に子どもは「授かる」ものから「つくる」ものへと価値観が転換したと言われるが（中山，1992），これから子どもを産み育てていこうとする若い世代の人たちが、子育ての負の部分にばかり目を向けることになれば、子どもを持つことへのハードルはおのずと高くなるであろうし、じっさい「結婚しても必ずしも子どもをもつ

必要はない」という考えに賛同を表明する人の数が増えつつある（内閣府大臣官房政府広報室，2007）こと背景には、そうした報道の存在があることも見逃してはならない。少子化について考えるには、いま子育てをしている人がじっさいのところどの程度、またどのような場面で否定的な感情に至るのか、それが特異的なことなのか、あるいはそうでないのか、何が背景にあるのかなど、広い視野に立って現実を理解することが必要だと言えよう（青木・神宮，2000）。

2. 否定的な育児感情の構成要素

ところで、否定的な育児感情とひとことで言っても、その構成要素については研究者間に一定のコンセンサスがあるわけではない。もっとも一般的に用いられる用語として「育児ストレス」（英語では parenting stress）があるが、育児不安や育児困難感、育児による制約感、あるいは子どもへの衝動的な感情、苛立ちなど、その内容はかなり幅広い。否定的な育児感情に関連するそうした具体的な中味の検討については、荒牧・無藤（2008）に詳しいので、それを参照いただくとして、本研究ではとくに、この中の苛立ち感情、それも母親が子ども本人に対して抱く苛立ちに着目することにした。その理由のひとつは、あとでも触れるように本研究の対象が小学生の子どもを持つ母親だという点にある。育児不安や困難感、制約感のような感情は、乳幼児期の親にはかなり一般的だと考えられるが（木村・西内・平野（小原）・高田，2006），言葉による意思の疎通も十分に可能で、かつ離れて過ごす時間がかなり長くなる就学後の子どもの母親には、これらの感情はそれ以前の時期の子どもの親ほど強くないであろう。それに対し、本研究で取り上げる苛立ち感情は、小学生の親にも依然として強いことが数少ない研究報告で指摘されている（木戸・内山・北川・林，2005）。

苛立ち感情は、先行研究においても多種多様な否定的感情の一部として取り上げられているが、「瞬間的に怒りを感じる」、「とめどなく叱る」のように、きわめて強い情動を伴うものから（海老原・秦野，2004；野口・石井，2000），「（子どもの行動に対して）理解に苦しむ」や「気が滅入る」のように、それほど強くない情動を含む概念として用いているものまでである（中嶋ら，1999）。本研究では、中嶋らにしたがって、苛立ち感情を比較的幅広いものと捉えることにした。

3. 先行研究の問題点と本研究の特徴

さらに、先行研究を概観してみて気づくのは、母親が否定的な感情を味わうことがどのぐらいの頻度なのかを問うだけのものが圧倒的に多いことである(「カッとなることがどれくらいあるか」、「気が滅入ることがどれくらいあるか」など)。これに対して本研究では、苛立ち感情を具体的な日常場面のどこで、また何をきっかけに抱くのかを文脈に依拠しつつ質的に捉えることを目指した。苛立ち感情それ自体をどのぐらいの頻度で持つかを全体として捉えることに意味がないわけではないが、目に浮かぶ具体的な一つひとつの場面を想像しながら、どういう文脈でそうした感情が沸き起こるのかを改めて整理することにより、子どもを育てる親の心理的内実がよりリアルに描けるのではないかと考えたのである。

本研究のもう一つの特徴は、調査対象が小学生の親だという点にある。否定的な育児感情を扱った先行研究は、ほぼ例外なく乳幼児の母親(ないし父親)を対象としたもので(柏木・若松, 1994; 木村ら, 2006; 森下, 2006; 坂間, 2000)、学齢期に至ると対象はただちに障害を持つ子どもの親だけに焦点化されてしまう(例えば、新田・種子田・中嶋, 2004)。これは、乳幼児期の子どもの方が一緒にいる時間も長く手もかかり、親のストレスが大きいという前提に基づいている。とくに就園前の子どもを持つ専業主婦の母親の場合、一日の多くの時間を子どもと一対一で過ごしており、もっともストレスが高いのがこの時期であるのは当然のことと言える。だがいっぽうで、数少ない先行研究によれば、就学後においても母親の否定的感情は依然として強い。このこと背景には、学業や習い事が本格化し、さらには自律した行動が子どもの側にいっそう強く求められるのがこの時期の特徴であること、また母親も、いったん仕事を辞め、子育てに専念していたのを、子どもの入学を機に再就職したいと強く望むのがこの時期であることとも関係していよう(労働政策研究・研修機構, 2008)。それにもかかわらず、就学後の子どもを持つ母親がどのような心境で毎日を過ごしているのか、どの程度、またどんな場面で子どもに否定的な感情を抱くのかを本格的に検討したものがほとんどないことは意外だと言わざるを得ない。

以上のことを踏まえ、本研究では、子どもを育てる親がもっとも日常的に経験しているであろう「苛立ち感情」に着目し、小学校低学年の児童を持つ母親が、生活の文脈に依拠してどのようなときに子

どもに苛立ちを覚えるのか、またその背景要因として何が考えられるのかを明らかにすることを目的に質問紙調査を行った。なお、あとで方法にも述べるように、具体的な日常場面を念頭に置いた尺度は筆者の調べたかぎりにおいて存在しなかったため、予備的にインタビューを行い、質問項目を立ち上げるところからスタートした。

4. 否定的な育児感情に関連する要因

否定的な育児感情に関連する要因としては、これまでにも様々な変数に取り上げられてきた。一般的には、夫のサポートが多く、妻の認知する夫婦関係が良好であるほど、子どもに向かう否定的感情は少なく(Belsky, 1984; 柏木・若松, 1994; 野口・石井, 2000)、妻が就労している場合より就労していない場合のほうが、否定的感情が強い(牧野, 1988; 目良・柏木, 2005)。また、乳幼児期に限ってのことだが、子どもの年齢が高いほど否定的感情が強いこと(野口・石井, 2000; 山川・柏木, 2004)、一人っ子の親よりも二人以上の子どもを持つ母親のほうが、否定的感情が強いこと(野口・石井, 2000; 嶋松・高山, 2004)、また苛立ちや怒りも複数の子どもを持つ母親のほうが強いこと、などが指摘されている(Gotlieb & Mendelson, 1995)。これ以外では、伝統的な母親役割観や「母性愛」意識、あるいは母親の生活感情、つまり自分の生きかたやいまの生活への満足感もまた、子どもへの否定的感情に関与することが指摘されている(江上, 2005; 永久, 1995)。

以上の先行研究を踏まえ、本研究においても、背景要因として、夫との関係、伝統的母親役割観、「母性愛」意識、生活感情などを変数に盛り込んだ。また、基本的な属性として、母親の年齢や経済状況、子どもの出生順位なども取り上げ、これらが互いにどのように具体的な苛立ち感情の発現に影響しているのかを大量データによる統計的手法により明らかにしようと考えた。

5. 本研究の目的

ここで、改めて本研究の目的をまとめる。

1. 小学生の子どもを育てる母親がどのような文脈において子どもに苛立ち感情を持つかを調べる尺度をインタビューデータに基づいて作成し、さらに大量データを用いて、その構造を明らかにする。
2. それら文脈に依拠した母親の苛立ち感情の背景

要因について、とくに、夫婦関係や伝統的母親役割観、「母性愛」意識、生活感情など、従来から関連が指摘されているものに加え、子どもの性別や出生順位との関連も確かめる。

方 法

1. 予備インタビュー

(1) 手続き

子どもに対してどのようなときに苛立ちをおぼえたり腹立たしい気持ちになったりするかを具体的な生活の文脈のなかで検討する目的で、5名の母親に協力を依頼してインタビューを行った。これらの母親はいずれも、筆者の勤務する大学の近隣にある私立の幼稚園の園児の保護者で、3歳男児の母親、5歳男児の母親、6歳男児の母親、10歳男児と4歳女児の母親、5歳女児と3歳男児の母親の5名であった。インタビューは筆者と臨床・発達系の大学院生2名(A, B)の計3名が分担して行った。

インタビューでは、ここ最近のことをイメージしてもらい、①どんなときに子どもに腹を立てたか、②参ったなあと感じたか、気が滅入るような思いをしたか、③そのとき子どもにどんな風に接したか、④怒ったり叱ったりした後でどんな気持ちになったか、の3点を尋ねた。具体的な場面をできるだけたくさん思い出してもらえよう、ある場面についての語りが一通り終わっても、他にはないかを繰り返し尋ねた。インタビューの進めかたについては筆者が詳細なマニュアルを作成し、それをA, Bの二人にも周知してもらった。

インタビューの時間はそれぞれ1時間から1時間半程度であった。同意を得たうえでICレコーダーに録音し、それをもとに逐語録を作成した。さらに、後述する質問項目の作成を目指して上記のインタビュー項目①に対する回答に着目し、数名の母親に共通してみられるような内容を抽出して質問項目の作成に役立てた。

(2) 生活文脈に依拠した子どもへの苛立ち感情測定尺度の作成

以上の手続きを経て15項目からなる測定尺度を完成させた。なお、質問文には具体的な内容がイメージしやすいよう、先の予備インタビューで得られた回答を参考に、具体的な場面を補足的に示した。

2. 本調査

(1) 協力者

名古屋市内の公立小学校3校に協力を依頼し、1年生から3年生までの生徒の保護者を対象に質問紙を配布した。

(2) 手続き

質問紙は、担任教師を通じて生徒に配布してもらった。質問紙には保護者あての手紙をつけ、自宅で回答したのち、それを担任教師に提出するよう依頼する旨が書かれていた。配布から回収までの期間は5日～1週間程度であった。質問紙の配布数は738、うち回収されたのが413であった(回収率56.0%)。小学校、あるいは学年による回収率の偏りはなかった。

(3) 質問紙の構成

① 生活文脈に依拠した子どもへの苛立ち感情

先に予備インタビューに基づいて作成した15項目の内容文に対し、それぞれの文脈で子どもに苛立ちや怒りを感じるものがどの程度あるかを、「1. いつも」、「2. しばしば」、「3. たまに」、「4. あまりない」、「5. 全くない」の5件法で回答してもらった。

この尺度については、子どもが複数いる保護者にはそれぞれの子どものについて別々に答えてもらった。

② 生活感情

永久(1995)が作成した生活感情尺度をもとに、子育てをしている今の心境や夫・家族に対する気持ちを問うものを選び32項目を用いた。すべての項目に対し、5件法(「1. 全くその通りである」、「2. どちらかといえばそうである」、「3. どちらともいえない」、「4. どちらかといえばそうでない」、「5. 全くそうでない」)で回答してもらった。

③ 育児負担感・子どもへの否定的感情

中嶋ら(1999)を参考に、子育てに対する負担感や子どもへの全般的な否定感情を尋ねる尺度を用いた。中嶋ら(1999)では13項目が用いられているが、この研究の因子分析においてどの因子にも負荷していない3項目を削除し、項目数を10とした。5件法(「1. いつもある」、「2. しばしばある」、「3. たまにある」、「4. あまりない」、「5. 全くない」)で回答してもらった。

④ "母性愛" 信奉傾向

江上（2005）の作成した母性愛信奉傾向尺度の項目を用いた。項目数は12、すべての項目に対し、5件法（「1. 全くその通りである」、「2. どちらかといえばそうである」、「3. どちらともいえない」、「4. どちらかといえばそうでない」、「5. 全くそうでない」）で回答してもらった。

⑤ 伝統的母親役割観

永久（1995）が子どもについての考えを問うために用いた尺度から、「教育熱」と命名されている因子に含まれる項目を一部削除し、「伝統的母親役割観」とみなしてこれを用いた。項目数は6、すべての項目に対し、5件法（「1. 全くその通りである」、「2. どちらかといえばそうである」、「3. どちらともいえない」、「4. どちらかといえばそうでない」、「5. 全くそうでない」）で回答してもらった。

⑥ 子どもへの期待

内閣総理大臣官房広報室（1991）による「青少年と家庭に関する世論調査」で用いられている項目を参考に、子どもに対してどのようなことを期待するかを尋ねた。21の内容に対し、子どもに望むことすべてに○をつけてもらった。なお、これについては本報告の分析では触れていない。

⑦ フェースシート

家族全員の年齢もしくは学年、家族構成、両親の職業、年収、母親の就労状況や仕事に対する意識などについて回答してもらった。

具体的な質問内容等については、添付資料を参照されたい。

(4) 分析データ

まず、回収された質問紙のうち記入漏れが多かったもの、回答者が母親以外の人物であったものを分析から除外した。また、子どもの人数が4人以上である家庭もケース数が少なかったために分析から除外した。以上、予備的な検討ののち、最終的には383名の母親のデータを分析に用いることにした。

母親の平均年齢は37.9歳（SD=3.78）、父親の平均年齢は40.24歳（SD=4.64）であった。母親の教育歴については、中卒3、高卒92、専門学校卒26、短期大学卒118、四年生大学卒106、大学院卒3、その他12、無回答23であった。父親の教育歴については、中卒5、高卒67、専門学校卒13、短期大学卒5、四年制大学卒223、大学院卒23、その他18、

無回答23であった。父親の職業は、会社員が7割以上で、次いで自営業、公務員が多かった。家庭の年収は、600万円未満が82、600～800万円が92、800～1,000万円が73、1,000万円以上が72、無回答が64であった。核家族世帯が347、拡大家族世帯が27、その他が9であった。また、子どもの人数については、1人が63家族、2人が239家族、3人が81家族であった。

結 果

1. 生活文脈に依拠した子どもへの苛立ち感情

筆者らの作成した苛立ち感情測定尺度について、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った。なお、同一の母親が複数の自分の子どもに対して評定を行った場合も、ここでは別個のデータとして扱ったため、全データ数は782であった。

分析の結果、固有値が1.0を超える因子が3つ抽出された（表1）。第1因子において因子負荷量が高かったのは、「母親自身に困ったことや悩みがあるとき」、「タイミングの悪い状況で、要求を出されたり話しかけられたりすることに対して」、「予定していた段取りが狂わされることに対して」、「自分自身の体調がよくないとき」などで、いずれも母親の側の事情に係るものであった。このことから、第1因子を「母親の側の事情に起因する苛立ち感情」とした。第2因子において因子負荷量が高かったのは、「（子どもの）生活上のきまりや生活習慣のことで」、「自主的に行動しないことに対して」、「自分で自己管理ができないことに対して」などで、いずれも子どもが自主的、自律的に行動しないことに関係したものであった。このことから第2因子は「子どもが自主的・自律的でないことに起因する苛立ち感情」とした。第3因子において因子負荷量が高かったのは、「子どもから自分に対する態度に対して」、「子どもの性格にかかわることに対して」、「ウマが合わないことに対して」の3項目であった。これらはいずれも客観的にみた子どもの性質ではなく母親の主観に基づく自分と子どもとの関係にかかわるものと考えられたため、「子どもの振舞いが主観的に気に入らないことに起因する苛立ち感情」と名付けた。

なお、これら3因子の因子間相関をみたところ、すべての組み合わせにおいて非常に強い正の相関関係が認められた（ $r_s > 0.41$, $p_s < 0.001$ ）。以降では、

表 1. 母親の苛立ち感情測定尺度に関する因子分析の結果

質問内容	第1因子	第2因子	第3因子	共通性
第1因子：母親の側の事情に起因する苛立ち感情				
11. お母様ご自身に困ったことや悩みがあるとき	0.737	-0.011	-0.077	0.53
10. 別の用事で忙しいときなど、タイミングの悪い状況で、要求を出されたり、話しかけられたりすることに対して	0.689	0.102	0.008	0.55
12. 予定していた段取りが狂わされることに対して	0.678	0.083	-0.039	0.40
9. お母様ご自身の体調が良くないとき	0.649	0.052	-0.038	0.44
13. 長時間、そばでいっしょにいるとき	0.551	-0.014	0.157	0.18
14. 夫や他の家族との関係がギクシャクしているとき	0.497	-0.172	0.210	0.58
第2因子：子どもの自主性・自律性に起因する苛立ち感情				
6. 生活上のきまりや生活習慣のことで	0.001	0.798	-0.055	0.35
8. 親に言われないと動かない、自主的に行動しないなどのことに対して	-0.032	0.734	0.069	0.59
2. お子さんが自分で自己管理(時間の管理や健康管理)をしないことに対して	-0.049	0.712	0.072	0.43
7. 行儀作法やマナーにかかわることで	0.087	0.630	-0.126	0.56
第3因子：子どもの振る舞いが気に入らないことに起因する苛立ち感情				
3. あなたに対する態度に対して	-0.012	0.067	0.589	0.48
1. お子さんの性格にかかわることに対して	-0.073	0.243	0.578	0.49
15. そもそも、そのお子さんとウマが合わないことに対して	0.154	-0.120	0.527	0.41
4. あなたの言ったことがお子さんに伝わらないことに対して	0.046	0.370	0.321	0.53
5. お子さんの友達とのかかわりに対して	0.091	0.174	0.222	0.30
固有値	5.448	1.787	1.006	
因子寄与	3.744	3.976	3.573	

注：因子負荷量が0.40以上のところにアンダーラインを付した。

因子ごとに尺度得点を算出し、これを分析に用いた。

2. その他の変数についての基本的分析

(1) 母親の仕事の経歴ならびに仕事に対する意識

フェイスシートで尋ねた項目に基づいて、母親の仕事の経歴や、いま現在の就労状況などについて全体的な分布を調べた。具体的には、1. 結婚、出産の過程でも仕事を継続し、いまも仕事を持っている母親、2. 結婚ないし出産のいずれかの時点で仕事を辞めたが、いまはまた何らかのお仕事を持っている母親、3. 結婚ないし出産のいずれかの時点で仕事を辞め、いまは家事・育児に専念していて今後も仕事を再開する気持ちのない母親、4. 結婚ないし出産のいずれかの時点で仕事を辞め、いまは子育てのほうが大事だと思って、それを優先している母親、5. 結婚ないし出産のいずれかの時点で仕事を辞め、これからやりたいことを見つけないと思っている母

親、6. それ以外の母親、の6つに分類した(表2)。いずれかの時点で仕事を辞めたものの、いまは再開している人がかなり多く、いまは仕事をしていなくても、いずれはやりたいことがある、もしくはこれから探そうと思っているという人を含め、仕事を志向する母親が大半を占めることがわかった。

(2) 生活感情について

いまの生活に対する心境や夫・家族に対する気持ちについて尋ねた32の項目に基づき探索的に因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行った。複数の因子にまたがって因子負荷量が高い項目や、解釈が困難な因子を構成しそうな項目を除外するなどして分析を行い、9項目(2, 3, 7, 8, 10, 19, 23, 28, 30)を除いて分析を行うのが最も妥当と判断した。これにより固有値が1.0を越える因子は4つ抽出された(表3)。第1因子で因子負荷量が高かつ

表 2. 母親の仕事の経歴と仕事に対する考え

内 容	人 数	割合 (%)
1. 出産後もずっと仕事を続けている	34	9.0
2. いったん仕事を辞めたが、いまは再開している	132	35.1
3. 仕事を辞めて、いまも再開の気持ちはない	12	3.2
4. 仕事を辞めていまは家事や育児を優先しているが、いずれはやりたいことがある	115	30.6
5. 仕事を辞めた、これからやりたいことを見つけようと思っている	45	12.0
6. その他	38	10.1
合 計	376	100.0

欠損値 7

表 3. 生活感情に関する尺度に対する因子分析の結果

質問内容	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	共通性
第1因子：社会とのつながりが実感できず自分なりに生きている感じがない焦り，不安					
16. 社会から個人として認められないようで不満だ	<u>0.914</u>	0.053	-0.006	-0.159	0.62
15. 私には将来の具体的な目標がないので不安だ	<u>0.859</u>	0.057	-0.001	-0.033	0.65
14. 毎日が同じことのくり返して過ぎていくようで焦る	<u>0.729</u>	-0.104	0.037	-0.042	0.57
26. 将来何かしたいが，その何かがわからなくて焦る	<u>0.720</u>	0.228	-0.072	0.192	0.59
12. 社会から取り残されるようで不安だ	<u>0.702</u>	0.004	0.014	0.011	0.49
21. 毎日の仕事にたいした意味を見出せないようで不満だ	<u>0.689</u>	-0.182	-0.009	-0.130	0.54
22. やっていてもとても楽しいとか，とても興味をもてるものがあまりなく，物足りなく感じる	<u>0.584</u>	-0.163	-0.066	-0.046	0.49
20. いまの私は一人前でないようで焦りを感じる	0.479	-0.295	0.139	0.083	0.48
32. 子どもが離れていったあとの自分が不安だ	0.449	0.198	-0.102	0.237	0.33
第2因子：いまの生き方への充実感					
27. 私は役に立っているという満足感がある	0.062	<u>0.834</u>	-0.059	0.052	0.55
17. 私は結構いい母親だ，と思えて満足だ	0.115	<u>0.702</u>	-0.026	0.005	0.39
24. 自分が必要とされているという満足感がある	-0.025	<u>0.639</u>	0.111	0.058	0.48
13. 私はいまの自分が大好きだ	-0.045	<u>0.630</u>	0.044	-0.050	0.51
18. 毎日の生活が充実していてとても楽しい	-0.110	<u>0.589</u>	0.091	-0.066	0.58
29. 日ごろ，はりのある生活を送っているという実感がある	-0.181	<u>0.570</u>	-0.037	-0.065	0.52
第3因子：夫をはじめ家族に支えられているという安心感					
4. 夫といろいろなことを話し合えるのは楽しい	-0.065	-0.149	<u>0.921</u>	0.144	0.65
6. 夫とお互いにわかり合っている感じで安心だ	-0.006	-0.005	<u>0.882</u>	-0.039	0.82
5. 私は家族にとっても理解されていて幸せだ	0.042	0.195	<u>0.753</u>	0.005	0.73
1. 私の家族の雰囲気がとても好きだ	0.086	0.241	<u>0.566</u>	-0.042	0.51
9. 夫が家事，子育てをあまり手伝わないのが不満だ	0.082	0.066	<u>-0.422</u>	0.213	0.33
第4因子：今までの生き方に対する悔いがあることによる将来展望の不確かさ					
25. 今までの生き方，人生の選択を後悔するときがある	-0.112	-0.083	-0.059	<u>0.682</u>	0.48
11. 自分や家族の老後のことを考えると不安になる	0.049	0.049	0.066	<u>0.601</u>	0.33
31. いまのままの生き方でいいのかと近頃不安になる	0.348	-0.109	0.044	<u>0.499</u>	0.68
固有値	9.148	2.380	1.566	1.042	
因子寄与	7.260	6.563	5.294	5.666	

注：因子負荷量が0.40以上のところにアンダーラインを付した。

たのは「社会から個人として認められないようで不満だ」，「毎日が同じことの繰り返して過ぎていくようで焦る」など9項目で，社会において一人の個人として自分なりの生き方ができているという実感が持てず，そのことに焦りや不安があることをあらわす因子と考えられた。このことから，第1因子を「社会とのつながりが感じられず自分なりの生き方をしていて実感がないことからくる焦りや不安」とした。第2因子は「私は役に立っているという満足感がある」，「私はいまの自分が大好きだ」，「私は結構いい母親だと思えて満足だ」など6項目で因子負荷量が高く，いまの生活や自分に対する肯定感情や満足感をあらわす因子と考えられた。このことから，第2因子を「いまの自分に対する充実感」とした。第3因子において負荷量が高かったのは「夫といろいろなことを話し合えるのは楽しい」，「夫とお互いにわかり合っている感じで安心だ」などで，夫や家族に支えられているという感覚をあらわす因子と考えられた。したがって，第3因子は「夫をはじめ家族に支えられている安心感」とした。第4因子では，「今までの生き方，人生の選択を後悔するときがあ

る」，「自分や家族の老後のことを考えると不安になる」，「いまのままの生き方でいいのかと近頃不安になる」などで因子負荷量が高く，これまでの人生に対して「これでよかった」と思える生き方をしてきた実感が持てず，いまのこと，将来のことを肯定的に予測できない不安をあらわす因子と考えられた。このことから，第4因子を「着実に納得の行く人生を積み重ねてきたという実感が持てないことからくる将来への不安」とした。

以上，4つの因子について因子間相関を調べたところ，あらゆる因子間の非常に強い相関があり ($|r| > 0.34$, $p < 0.001$)，第2因子と第3因子，第2因子と第4因子の間には正の相関が，それ以外の組み合わせでは負の相関が認められた。以降では，因子ごとに尺度得点を算出し，これを分析に用いた。

(3) 育児負担感・子どもへの否定的感情

育児負担感，ならびに子どもに対して母親が感じる全般的な否定感情について尋ねた項目について，探索的な因子分析（主因子法，プロマックス回転）を行った。固有値が1.0以上の因子が2つ抽出され，

表4. 育児負担感・子どもへの否定的感情に関する尺度に対する因子分析の結果

質問内容	第1因子	第2因子	共通性
第1因子：子どもへの全般的な否定感情			
10. お子さんとのかわりに、イライラしたり気が滅入ったりすることがありますか？	0.837	-0.020	0.68
7. お子さんとのかわりの中で、われを忘れてしまうほど頭に血がのぼることがありますか？	0.814	-0.104	0.58
6. お子さんとのかわりで、腹を立てることがありますか？	0.702	-0.019	0.48
8. あなたがお子さんにやってあげていることで、報われないと感じるがありますか？	0.660	0.012	0.44
9. お子さんのやっていることで、どうしても理解に苦しむことがありますか？	0.644	0.040	0.44
5. お子さんとのかわりで、気疲れを感じるがありますか？	0.503	0.287	0.49
第2因子：子どもの存在による制約感・束縛感			
3. お子さんがあるために、趣味や学習、その他の社会活動などに支障をきたしていると感じるがありますか？	-0.106	0.863	0.66
1. お子さんの世話のために、かなり自由が制限されていると感じるがありますか？	-0.075	0.820	0.61
4. お子さんのために、自分には望ましい私生活(プライバシー)がないと感じるがありますか？	0.057	0.753	0.62
2. お子さんの世話が、自分で責任を負わなければならない家事等の仕事と比べて、重荷になっていると感じるがありますか？	0.163	0.663	0.58
固有値	4.795	1.639	
因子寄与	3.803	3.458	

注：因子負荷量が0.40以上のところにアンダーラインを付した。

それぞれ次のように命名した（表4）。第1因子において因子負荷量が高かったのは、「お子さんとのかわりにイライラしたり気が滅入ったりすることがありますか?」、「お子さんとのかわりの中で、われを忘れてしまうほど頭に血がのぼることがありますか?」、「お子さんのやっていることでどうしても理解に苦しむことがありますか?」などで、ある特定の文脈に関係したものではなく、全体として子どもに対しどの程度の否定的感情を抱くかをあらわす因子と考えられた。このことから、第1因子は「子どもに対する全般的な否定感情」と命名した。第2因子で因子負荷量が高かったのは、「お子さんがあるために、趣味や学習、その他の社会活動に支障をきたしていると感じるがありますか?」、「お子さんの世話のために、かなり自由が制限されていると感じるがありますか?」などで、いずれも子どもの存在が自分の活動の妨げと感じられ、動きが制約されている、重荷になっているという気持ちをあらわす内容であった。このことから、この第2因子を「子どもの存在による制約感・束縛感」と命名した。なお、第1因子と第2因子の間には非常に強い正の相関が認められた ($r=0.50, p<0.001$)。以降では、因子ごとに尺度得点を算出し、これを分析に用いた。

ここで抽出された第1因子については、前述した生活文脈に依存しての子どもへの苛立ち感情と関係があるかどうかを確かめた。その結果、第1因子(母親側の事情に起因する苛立ち感情)、第2因子(子どもが自主的・自律的でないことに起因する苛立ち感情)、第3因子(子どもの振舞いが主観的に気に入らないことに起因する苛立ち感情)のいずれ

とも、この全般的な否定感情は正の強い相関を持っていた ($r_s>0.47$, いずれも $p<0.001$)。

(4) "母性愛" 信奉傾向

"母性愛" 信奉傾向については、この尺度を作成した江上(2005)が単一尺度として用いている。そのため本研究においても、信頼性係数 α を計算し、単一尺度として扱ってよいかを確認した。その結果、 α 係数は十分に高い値を示した(0.89)。以降では、全12項目の平均値を求め、分析に用いた。

(5) 伝統的母親役割観

伝統的母親役割観についても、永久(2005)にならって単一の因子として扱ってよいかを確かめた。信頼性係数 α は基準に達しており(0.71)、単一尺度として用いることの妥当性が確認された。これについても、以降では6項目の平均値を求め、分析に用いた。

3. 生活文脈に依拠した母親の苛立ち感情と他の変数との関連

これ以降の分析では、小学1年生から3年生の子どもに対しての母親の苛立ち感情に着目し、他の変数との関連を個別に検討した。

(1) 子どもの出生順位、性別との関連

母親の苛立ち感情に関して抽出された先の3つの因子について尺度得点を算出し、子どもの出生順位や性別との関連を分析した。この学年に該当する子どもは418名であった。予備的に行った分析において学年による影響はないことが確認されたため、学

表 5. 苛立ち感情と子どもの人数、性別、出生順位との関係

苛立ち感情	子どもが一人		子どもが二人				子どもが三人					
			第一子		第二子		第一子		第二子		第三子	
	男児	女児	男児	女児	男児	女児	男児	女児	男児	女児	男児	女児
第 1 因子：母親の側の事情	2.48	2.70	2.66	2.74	2.34	2.63	2.79	2.48	2.10	2.37	2.28	2.24
第 2 因子：子どもの自主・自律性	2.71	2.70	2.92	3.02	2.76	2.68	3.31	3.18	2.76	2.27	2.40	2.24
第 3 因子：子どもの振舞いへの主観的嫌悪	2.44	2.46	2.50	2.73	2.14	2.39	2.65	2.41	2.24	2.49	2.11	2.12

注：表中の数値は尺度得点の平均値である

年は変数に加えなかった。表 5 は全体のデータを示したものである。

① 子どもが一人である場合

性別の影響をみるために、先の 3 つの苛立ち感情の尺度得点を従属変数とする平均値の差の検定を行った。その結果、いずれの因子についても性別の影響は確認できなかった ($t_{\text{test}} < 1.48$, ns)。

② 子どもが二人である場合

出生順位と性別の影響を確かめるために、これらを独立変数、苛立ち感情の尺度得点を従属変数とする二要因の分散分析を行った。その結果、出生順位、性別のいずれについても主効果が有意であった（出生順位： $F(1, 247) = 7.79$, $p < 0.01$; 性別： $F(1, 247) = 5.54$, $p < 0.05$ ）。交互作用は有意ではなかった。第二子に対してよりも第一子に対して、また男児に対してよりも女児に対して、母親は、自分の側の事情に起因する苛立ち感情を強く持つことが明らかになった。

第 2 因子についても同様に分析を行ったところ、出生順位の主効果のみ有意であることが確認された ($F(1, 249) = 6.22$, $p < 0.05$)。第二子に対してよりも第一子に対してのほうが、子どもが自主的・自律的でないことに起因する苛立ち感情が強いことが明らかになった。

第 3 因子については、出生順位、性別のそれぞれの主効果が有意であった（出生順位： $F(1, 249) = 14.09$, $p < 0.001$; 性別： $F(1, 249) = 6.64$, $p < 0.05$ ）。交互作用は有意ではなかった。第 1 因子と同様、第二子より第一子に対して、また男児より女児に対して、子どもの振舞いが主観的に気に入らないことに起因する苛立ち感情が強いことが明らかになった。

③ 子どもが三人である場合

出生順位と性別を独立変数とする二要因の分散分析を行った結果、3 つの因子すべてについて出生順位の主効果のみが有意であった（第 1 因子： F

(2,88) = 4.55, $p < 0.05$, 第 2 因子： $F(2, 91) = 12.04$, $p < 0.001$, 第 3 因子： $F(2, 88) = 3.76$, $p < 0.05$)。Tukey の多重比較を行ったところ、第 1, 第 2 因子については、第二子、第三子に比べて第一子に対する苛立ち感情が有意に強いことがわかった。また、第 3 因子については、第三子よりも第一子に対する苛立ち感情のほうが強いことが明らかになった。

(2) 母親の仕事の経歴ならびに仕事に対する意識との関連

仕事の経歴や仕事に対する意識に関して母親を分類したが、この分類によって、子どもへの苛立ち感情に違いがないかを検討した。一要因の分散分析を行った結果、いずれの因子に関しても主効果は有意でないことが確認された ($F_s(5, 408) < 2.06$, ns)。

(3) 年収との関連

年収と母親の苛立ち感情との関連を一要因の分散分析を用いて検討した。その結果、いずれの因子についても主効果は有意ではなかった ($F_s(3, 343) < 1.68$, ns)。

(4) 生活感情、子どもの存在による制約感・束縛感、"母性愛" 信奉傾向、伝統的母親役割観との関連

生活感情のほかでは、子どもの存在による制約感・束縛感が強い母親ほど、子どもへの苛立ち感情が強かった。"母性愛" 信奉傾向、伝統的母親役割観な

表 6. 苛立ち感情と他の変数との関連

	苛立ち感情		
	第1因子：母親の側の事情	第2因子：子どもの自主・自律性	第3因子：子どもの振舞いへの主観的嫌悪
生活感情			
第1因子：自分なりの生き方をしている実感がないことからくる焦りや不安	0.50***	0.18***	0.26***
第2因子：いまの自分に対する充実感	-0.41***	-0.11	-0.30***
第3因子：夫をはじめ家族に支えられているという安心感	-0.22**	-0.14*	-0.20**
第4因子：納得の行く人生を積み重ねてきたという実感が持てないことからくる将来への不安	0.42***	0.19**	0.27***
子どもの存在による制約感・束縛感	0.37***	0.25***	0.24***
母性愛信奉傾向	-0.09	-0.10	-0.05
伝統的母親役割観	0.00	-0.03	0.00

注：表中の数値は相関係数である
* p<0.05; ** p<0.01; *** p<0.001

ど、自分が母親としてどうあるべきか、そもそも母親とはどのような存在であるべきかといった価値観は、子どもへの苛立ち感情と関連が認められなかった。

4. クラスタ分析による母親のグルーピング

以上では、日常生活のどのような文脈において母親が子どもに苛立ち感情を持つのか、またその関連要因として何が有力なのかを個々に検討してきた。ここでは、それらの変数を組み合わせるときに、全体としてどのような傾向を持つ母親が、子どもに対して苛立ち感情を持ちやすいかを分析していく。

まずここまでのところで、母親の仕事の経歴や仕事に対する意識、家庭の経済状況、「母性愛」信奉傾向、そして伝統的母親役割観については、苛立ち感情との関連が認められなかった。このため、以降の分析においてはこれらを変数から除外することにした。そのうえで、生活感情等の変数に基づいて、協力者である母親をいくつかのグループに分けようと考えた。具体的には、生活感情の第1~4因子と子どもの存在による制約感・束縛感の5つの変数から、クラスタ分析によりある程度似た傾向を持った母親をグルーピングしようと考えたのである。クラスタを作るにあたってはWard法で計算を行い、平方ユークリッド距離で個体間の距離を測定した。デンドログラムを見ながら、いくつかのクラスタに分けるのがもっとも妥当かを検討した結果、3つに分けるのがもっとも相応しいと考えられた。そして、各クラスタの特徴を改めて確認したところ、第2クラスタは、生活感情の第1、第4因子、そして子どもの存在による制約感・束縛感の得点が3クラスタ中でもっとも高く、生活感情の第2、第3因子の得点が3クラスタ中で最低であった。第3クラスタは、

この第2クラスタとは全く反対の得点傾向で、生活感情の第2、第3因子が高く、第1、第4因子および制約感・束縛感の得点が低かった。第1クラスタは、第2クラスタと第3クラスタのちょうど中間に位置していた。

以上をもとにそれぞれのクラスタの特徴を具体的に述べるなら、第2クラスタは、社会から孤立し、いまの生活に対する充実感が低く、将来に対しても明るい展望が見えず、夫からの支えも少ない、そのうえ子どもがいることで自分の活動が制約されているという意識を強く持っている母親から構成されていた。第3クラスタはこれと反対に、社会との接点も自覚でき、いまの生活に対する充実感も高く、将来への展望も明るいいうえに、夫をはじめ家族からの支えも十分にあると感じている母親たちであった。第1クラスタはこれらの中間に位置する母親たちということになる。

なお、第1、第2、第3クラスタに分類された母親の人数はそれぞれ、160名、105名、85名であった。欠損値があり、クラスタに分類されなかった母親が33名いた。これら3つのクラスタの分布について、子どもの人数(1人、2人、3人)による違いがないか確認したが、偏りは見られなかった。

続いて、これらのクラスタ間に、母親の仕事の経歴や仕事への意識、家庭の収入との関連がないかを検討した。その結果、母親の仕事の経歴による偏りがあり($\chi^2=19.81, p<0.05$)、調整済み残差を見たところ、第2クラスタには、現在仕事を再開している母親が少なく、いまは子育てを優先させているが、いずれはやりたいことがある(あるいはこれからやりたいことを見つけない)と考えている母親が多く含まれることがわかった。クラスタと経済状況との間には関係が認められなかった($\chi^2=6.18,$

ns)。

5. 母親の生活感情と子どもへの苛立ち感情との関連

クラスタ分析に基づく母親の分類に加え、子どもへの苛立ち感情との関連が確認された子どもの性別ならびに出生順位が全体としてどのようなパターンをなして母親の苛立ち感情に関係しているのか包括的に分析した。ここでは、子どもの人数別に分析を行った。

① 子どもが一人である場合

苛立ち感情の3つの因子をそれぞれ従属変数とし、子どもの性別と母親のクラスタを独立変数とする二要因の分散分析を行った。その結果、第1因子(母親の側の事情に起因する苛立ち感情)、第2因子(子どもの自主性・自律性がないことに起因する苛立ち感情)、第3因子(子どもの振る舞いが主観的に気に入らないことに起因する苛立ち感情)のいずれにおいても、クラスタの主効果が有意であることがわかった(表7)。Tukeyの多重比較によりどのクラスタ間に違いがあるかを調べた結果、3つの因子のいずれにおいても、他のクラスタに比べて第2クラスタに分類された母親の苛立ち感情が強いことが確認された。また第1因子では、第2クラスタに次いで第1クラスタ、第3クラスタと順に値が有意に小さくなっていくことが確かめられ、第2因子では、第2クラスタに比べて第1、第3クラスタの母親の値が小さいこと、第3因子では、第2クラスタと第3クラスタの母親の間に有意な違いがあることが確認された。

性別の主効果、性別とクラスタの交互作用は、いずれも有意ではなかった。

② 子どもが二人である場合

子どもが二人である場合の分析では、はじめに予備的に、性別、出生順位、クラスタの3つを独立変

数とし、苛立ち感情の3つの因子を従属変数とする三要因の分散分析を行った。その結果、独立変数に含めた3つの変数すべての交互作用が確認された。このため、男児のデータと女児のデータを分け、それぞれにおいて出生順位とクラスタを独立変数とする二要因の分散分析を再度行い検討することにした。

男児のデータでは、苛立ち感情の第1因子において出生順位とクラスタの主効果がともに有意であることがわかった(表8を参照)。Tukeyの多重比較を行ったところ、出生順位については第二子よりも第一子においてのほうが得点が高く、クラスタでは第3クラスタに比べて第1、第2クラスタにおいて得点が高いことが明らかになった。苛立ち感情の第3因子では、出生順位の主効果が有意で、多重比較の結果、第二子より第一子においてのほうが得点が高いことが明らかになった。第2因子では有意な結果は得られなかった。また交互作用はいずれの分析でも認められなかった。

女児のデータについても同様に分析を行った。その結果、苛立ち感情のすべての因子において、クラスタの主効果が有意であるという結果が得られたが、このうち第1因子と第3因子では、出生順位とクラスタの交互作用も有意であることがわかった。このため、第1因子と第3因子については交互作用の低位検定、すなわち単純主効果検定を行った。

第1因子の単純主効果検定では、まずクラスタごとに出生順位の影響があるかどうかを検討した。その結果、第1、第2クラスタでは出生順位の主効果は有意ではなく($F(1,115) < 3.48$, ns)、第3クラスタにおいてのみ出生順位の主効果が認められた($F(1,115) = 4.10$, $p < 0.05$)。このため、第3クラスタのデータにおいてBonferroniの不等式を用いたペアごとの比較を行ったところ、第一子に比べ第二子に対してのほうが、苛立ち感情の得点が高いことが明らかになった。いっぽう、今度は反対に、出

表7. 苛立ち感情と子どもの性別、クラスタとの関連(子どもが一人である場合)

	男 児			女 児			主効果 (F 値)		交互作用 (F 値)	
	第1クラスタ	第2クラスタ	第3クラスタ	第1クラスタ	第2クラスタ	第3クラスタ	性 別	クラスタ	性別×クラスタ	
苛立ち感情										
第1因子：母親の側の事情	2.55	2.78	2.21	2.68	3.15	2.17	0.90	6.43**	0.43	クラスタ:2>1>3
第2因子：子どもの自主・自律性	2.71	3.92	2.25	2.66	3.03	2.43	1.71	9.00***	2.11	クラスタ:2>1,3
第3因子：子どもの振る舞いへの主観的嫌悪	2.57	3.11	1.88	2.47	2.63	2.29	0.08	3.90*	1.29	クラスタ:2>3

注：表中の数値は尺度得点の平均値である

* $p < 0.05$; ** $p < 0.01$; *** $p < 0.001$

表8. 苛立ち感情と子どもの性別、クラスタとの関連（子どもが二人である場合）

	男 児									交互作用 (F 値) 性別×クラスタ
	第一子			第二子			主効果 (F 値)			
	第1クラスタ	第2クラスタ	第3クラスタ	第1クラスタ	第2クラスタ	第3クラスタ	出生順位	クラスタ		
苛立ち感情										
第1因子：母親の側の事情	2.57	2.97	2.59	2.51	2.48	2.09	10.13**	3.42*	2.18	出生順位:1>2 クラスタ: 1,2>3
第2因子：子どもの自主・自律性	2.81	3.07	3.25	2.81	3.09	2.55	2.13	1.21	2.10	
第3因子：子どもの振舞いへの主観的嫌悪	2.40	2.63	2.81	2.17	2.15	2.16	13.94***	1.04	1.16	出生順位:1>2
	女 児									交互作用 (F 値) 性別×クラスタ
	第一子			第二子			主効果 (F 値)			
	第1クラスタ	第2クラスタ	第3クラスタ	第1クラスタ	第2クラスタ	第3クラスタ	出生順位	クラスタ		
苛立ち感情										
第1因子：母親の側の事情	2.70	3.14	1.99	2.63	2.81	2.44	0.02	13.79***	3.80*	クラスタ3:出生順位2>1 出生順位1:クラスタ2>1>3 クラスタ:2>3
第2因子：子どもの自主・自律性	3.05	3.33	2.35	2.66	2.78	2.72	1.52	3.18*	2.70	
第3因子：子どもの振舞いへの主観的嫌悪	2.67	3.19	1.86	2.40	2.44	2.36	1.32	6.45**	5.02**	クラスタ2:出生順位1>2

注：表中の数値は尺度得点の平均値である
* p<0.05; ** p<0.01; *** p<0.001

生順位ごとにクラスタの影響がないかを確認した。その結果、第一子に関してのみクラスタの主効果が有意であった (F (2,115) =15.56, p<0.001)。Bonferroni の不等式を用いたペアごとの比較を行ったところ、第一子に関しては、第3クラスタよりも第1クラスタにおいて、また第1クラスタよりも第2クラスタにおいて、苛立ちの得点が高いことが明らかになった。

第2因子については、先述したとおりクラスタの主効果のみが認められたので、Tukey による多重比較を行った。その結果、第3クラスタよりも第2クラスタにおいてのほうが、得点が高いことが明らかになった。

第3因子の単純主効果検定では、まずクラスタごとに出生順位の影響を調べた。その結果、第2クラスタにおいてのみ出生順位の主効果が有意で (F (1,115) =9.33, p<0.01), 残る二つの因子では出生順位の影響が認められなかった (Fs (1,115) <2.60, ns)。Bonferroni の不等式を用いたペアごとの比較を行ったところ、第2クラスタでは、第二子よりも第一子に対してのほうが母親の苛立ち感情が強いことが明らかになった。続いて、出生順位ごとにクラスタの影響をみる単純主効果検定も行った。その結果、第一子においてのみクラスタの主効果が有意で (F (2,115) =11.14, p<0.001), ペアごとの比較をしたところ、第一子では、第3クラスタに

比べ第1, 第2クラスタの母親の得点が高いことが明らかになった。

③ 子どもが三人である場合

子どもが三人である場合も、先ほどと同様に、男児のデータと女児のデータを分けて分析することにした。その結果、男児、女児のいずれの分析においても、たいへんよく似た結果が得られた (表9)。すなわち、第1因子については、クラスタの主効果が、第2, 第3因子については出生順位の主効果が認められた。交互作用は見られなかった。

男児のデータの第1因子について、クラスタ間の比較をするために Tukey による下位検定を行った。その結果、第1, 第3クラスタに比べて第2クラスタにおいて得点が高いことが明らかになった。第2, 第3因子の下位検定では、いずれも第二子よりも第一子に対してのほうが有意に苛立ち感情の得点が高いことが明らかになった。

女児のデータの第1因子については、下位検定を行ったところ、第3クラスタに比べて第2クラスタにおいて得点が高いことが明らかになった。第2因子については、第二子、第三子に比べて第一子に対してのほうが苛立ち感情が高いという結果であった。第3因子については、下位検定では出生順位のいずれの組み合わせにおいても有意な差は見られなかった。

表 9. 苛立ち感情と子どもの性別、クラスととの関連（子どもが三人である場合）

	男 児									女 児			
	第一子			第二子			第三子			主効果 (F 値)		交互作用 (F 値)	
	第1クラス	第2クラス	第3クラス	第1クラス	第2クラス	第3クラス	第1クラス	第2クラス	第3クラス	出生順位	クラス	出生順位×クラス	出生順位×クラス
苛立ち感情													
第1因子：母親の側の事情	2.44	3.19	2.17	2.28		1.81	2.10	2.83	2.11	0.84	5.25*	0.31	クラス:2>1,3
第2因子：子どもの自主・自律性	3.17	3.50	3.35	2.32		2.86	2.40	3.00	2.00	3.58*	1.19	0.75	出生順位:1>2,3
第3因子：子どもの振舞いへの主観的嫌悪	2.44	2.76	2.67	2.29		1.92	2.13	2.00	1.89	3.37*	0.23	0.48	出生順位:1>2,3
苛立ち感情													
第1因子：母親の側の事情	2.64	2.83	1.56	2.31	2.44	2.44	2.21	2.43	1.78	1.18	5.05*	1.98	クラス:2>3
第2因子：子どもの自主・自律性	3.04	3.69	2.50	2.46	2.33	1.75	2.31	2.14	2.33	5.41**	1.41	1.06	出生順位:1>2,3
第3因子：子どもの振舞いへの主観的嫌悪	2.61	2.56	1.67	2.38	2.56	2.67	1.96	2.44	1.56	3.21+	2.55	1.65	

注：表中の数値は尺度得点の平均値である
* p<0.05; ** p<0.01; *** p<0.001

考 察

1. 生活文脈に依拠した苛立ち感情

本研究では、これまでに取り上げられることの少なかった、小学生の母親の否定的な育児感情に着目し、なかでも具体的な日常の場面で起こる苛立ち感情の構成要素の特定、ならびにそれに関わる背景要因の検討を行った。その結果、母親が子どもに対して抱く苛立ち感情は大きく3つの文脈で生じやすいことが明らかになった。第一に、子ども本人の振る舞いとは一切関係なく、母親個人がどういった状況にあるかが、子どもへの苛立ち感情の背景にあることが確認された。仕事に関わる問題が差し迫っているときや、家族関係・人間関係がぎくしゃくしているとき、体調がすぐれないときなど、具体的な状況は様々と考えられるが、母親自身の状況しだいですぐにイライラして子どもにあたってしまうというような経験は、多くの母親がじっさいにしていることに違いない。

そして、さらにもう一点、苛立ち感情が起こる文脈として興味深かったのは、母親が認知する子どもの行動への「気になる」、「気に入らない」、「ウマが合わない」といった漠然とした感情が子どもへの苛立ちに結びついているという結果である。親もひとりの人間である以上、たとえそれが自分の子どもで

あるとはいえ、気が合う子どもとそうでない子ども、ちょっとしたことが気になって仕方がない子どもとそうでない子どもがいるという事実は、じつは一般的にはよく語られることである（木村ら、2006）。ところが、研究ベースにおいては、このことが真正面から取り上げられることがあまりなかったのではないだろうか。確たる理由のない、自分でもはっきりと説明できないような相性のようなものが、ある子どもに対してより強い苛立ちを生み出す点を明らかにしたことは、本研究の成果のひとつと言えよう。

2. 苛立ち感情に関連する要因

子どもへの苛立ち感情の背景要因については、子どもの人数ごとに分析を行った。まず子どもが一人である場合には、母親自身がいまの自分や生活、家族からの支えをどのように捉えているかが子どもへの苛立ち感情に関係していることが明らかになった。子どもの性別は苛立ち感情に関係していなかった。このことをさらに具体的に言うなら、子どもの存在が自分の活動の手かせ足かせであると感じられ、社会とのつながりが実感できず、これから先の人生にも明るい展望が見いだせないほか、夫に支えられているという安心感も持てない、そういう生活感情を持つ母親ほど、様々な文脈の中で子どもに苛立ち感情を抱きやすいという結果であった。言い換えるなら、「個」として満足できる人生を送っているとい

う実感が持てるかどうか、ダイレクトに子どもへの苛立ち感情に関係してくるのだと言えよう。かつて女性は、子どもが生まれればおのずと期待どおりの母親役割を果たしていくのが当たりまえだとされた時代があった。しかし、柏木(2001)が繰り返し指摘しているように、「母親として」というよりも「一人の人間」として納得できる「いま」を過ごしているかどうか、子どもに対する態度にも影響するのだと考えられよう。

いっぽう、わが国において圧倒的多数を占める二人っ子家庭においては、子どもが男児なのか女児なのかによって、苛立ち感情のあらわれかたに違いが認められた。子どもが女児である場合には、一人っ子家庭の場合と同様どのような文脈での苛立ち感情に関しても母親のいまの心理背景が深く関与していたが、注目すべきは、その娘の出生順位が母親の生活感情と交互作用を持ちつつ苛立ち感情に関係しているという点であった。特に、母親の個人的な事情に起因する苛立ち感情、ならびに子どもの振る舞いが主観的に気になる(あるいは気に入らない)ことに起因する苛立ち感情に関しては、その女児が第一子である場合にかぎって母親の生活感情の影響を強く受けていた。また、後者の文脈での苛立ち感情に関しては、母親が自分の人生に満足感を得られず夫や家族からの支えも少ないと認識している場合にかぎって娘の出生順位による違いがあり、第一子の娘に対してその苛立ちが向かいやすいという結果であった。これに対し、男児に対する苛立ち感情については、女児と違って単純に出生順位そのものの影響が強く見られ、第一子に対しての苛立ち感情が大きいという傾向であった。

従来からわが国では、長男に対してはいち早く自立した人間に成長してほしいと願う傾向がある(幸田・城谷, 1998)。第二子である弟や妹の存在により、母親は、第一子の男児を「お兄ちゃん」という役割モデルにあてはめ、実際以上に「しっかりしている」と見誤り、ところがまだできないこともたくさんある現実とのギャップに直面して苛立ちを覚えるのではないだろうか。これに対して子どもが女児である場合には、「第一子であること」それだけでは苛立ち感情に関与していなかった。これには、男児の「お兄ちゃん」としての役割よりは、女児の「お姉ちゃん」としての役割のほうが、母親から期待されることとしてはハードルが低いことが関係している可能性がある。女児に対しては男児に対して

よりも、弟や妹をかわいがり世話役をつとめてほしいという期待が強く、女児は実際、男児よりも弟や妹の面倒をみる傾向があると言われる(菅原・中野, 1998)。そのため、男児が「お兄ちゃん」としてしっかりと自立した振る舞いをするよりも、女児が「お姉ちゃん」として弟や妹に養護的に関わることのほうが、親には見えやすいものと思われる。いっぽう、ここに母親が個人的に感じている自分の人生への不全感が加わると、「お姉ちゃんなのだからもっと・・・」「お姉ちゃんなのにどうして・・・」のように、「第一子であること」を理由づけに苛立ち感情を持ってしまうのかもしれない。以上の説明はかなりの部分が筆者の推測によるものである。したがって、この解釈の妥当性については、別のアプローチによる質的な検討が望まれる。

では、子どもが三人である場合はどうだろうか。三人きょうだいの母親に関しては、子どもの性別に関係なく結果はほぼ同じであった。母親の側の事情に起因する苛立ち感情にかぎっては、母親のその時点での生活感情に連動していることが確認されたが、それ以外の文脈での苛立ち感情については、一貫して子どもの出生順位の影響だけが見られ、「第一子であること」が苛立ちを招く大きな要因であることが明らかになった。これらの母親の場合、第一子が小学校低学年で、さらに年下に二人の弟ないし妹がいるため、母親は一番年上のその子どもに対し、男児であれ女児であれ、「早くなんでも一人でできるようにしてほしい」と感じやすく、また子どもの行動を「気に入らない」「反抗的」と捉えやすいのではないだろうか。

3. 改めて出生順位の影響について

男児と女児とではやや傾向が異なっていたものの、全体に特徴的だったのは、複数の子どもがいる母親の苛立ち感情に子どもの出生順位の影響が少なからず見られた点である。しかもその結果は、一部の例外を除けば、第二子や第三子に比べ第一子に対しての苛立ちが一貫して高いというものであった。当然のことながら、初めての子どもの子育ては幼い時期から母親に不安やストレスをもたらしやすい、からの発育や病気、授乳のことなど多くのことが気がかりを生む(都築・金川, 2001)。そのうえ第一子に対しては、基本的な生活習慣の自立や社会性、情動制御など、他方面にわたって母親の発達期待が寄せられやすい(菊池, 2008; 幸田・城谷, 1998)。

したがって、いっそう手のかかる弟や妹がいる場合、母親は第一子に対して、早く自分の手を離れて自立してほしいと急かす気持ちになりやすく、でもその反面、本当にできているのかが気になり、結局は「できない」こと、「気になる」ところに過剰に注意を向けやすいものと思われる。このことが、本当は自分の手を離れてひとり立ちしてほしいと願ういっぽうで、気になって放っておけずイライラ、ハラハラさせられるという循環を生み出している可能性がある、というのが筆者の今のところの見解である。この考えが果たして妥当であるかは、本研究のような量的な分析に加え、個別・事例的なデータに基づく質的検討が不可欠だが、筆者が本研究の予備インタビューで母親から聞いた内容や先行研究(木村ら, 2006)での事例検討などをみるかぎり、筆者の推測はかなり妥当性が高いのではないかと考えている。

4. 最後に

子どもへの苛立ち感情について、最後にひとつ述べておきたいことがある。それは、母親が(あるいは父親も)子どもに対して苛立ち感情を持つことは決してあってはならないこと、許されないことなのかという問題である。

方法のところにも述べたように、本研究では、はじめに数名の母親を対象に予備的なインタビューを行った。そして、すべての母親が口をそろえて言われたのは、ひとには言いにくいことだが自分は子どもの立場からすればきわめて不条理な怒り方や叱り方をたびたびするというニュアンスのことであった。しかも、すべての母親が、自分のそうした態度をその都度振り返り、「なんてかわいそうなことをしたのか」とあとで反省するのだということであった。なかには「こんなにたびたび子どもに苛立ちを持つのは自分ぐらいではないか、こんなことは他の人にもしゃべったことがない」と言って涙を流される方もあった。

政府は毎年、子どもに対して肯定的感情や否定的感情を持つ親がどのぐらいの割合でいるのかを調査し、報告している。その調査結果は、新聞をはじめマスコミにも報道されるが、きまってそのトーンは、「否定的な感情を子どもに対して持つのはいけないこと、悪いこと」というものである。だが、筆者の経験からすれば、多くの親は、子どもに対して感情的に腹を立てることもあるが、それと同時に愛しいという気持ちも他の誰にも負けないぐらい持ってい

る。先ほど、子どもに対して感情的に叱ったあとで深く反省するという、ある母親の語りを紹介したが、まさしく子育てとは「どうしようもなく腹がたつが、でもかわいい」という両価的な感情の微妙なバランスのもとで行われる営みなのだと思う。発達研究者として、子どもへの否定的な感情のマイナス面だけでなく、肯定的な感情も含めた、よりダイナミックな育児感情の実態を示していくことが今後必要だと感じる次第である。

注：本研究は、2005年度中京大学特定研究助成を得て行ったものである。

引用文献

- 青木紀久代・神宮英夫(2000). 子どもを持たないころ—少子化問題と福祉心理学—京都: 北大路書房
- 荒牧美佐子・無藤隆(2008). 育児への負担感・不安感・肯定感とその関連要因の違い: 未就学児を持つ母親を対象に 発達心理学研究, 19, 87-97.
- 浅川潔司・鎌田陽世・横川和章・古川雅文(1999). 母親の育児感情の構造に関する研究 兵庫教育大学研究紀要, 第1分冊, 学校教育・幼児教育・障害児教育, 19, 139-143.
- Belsky, J. (1984) The determinants of parenting: A process model. *Child Development*, 55, 83-96.
- Crnic, K. A., & Greenberg, M. T. (1990). Minor parenting stresses with young children. *Child Development*, 61, 1628-1637.
- Deater-Deckard, K., Smith, J., Ivy, L., & Petrill, S. A. (2005). Differential perceptions of and feelings about sibling children: Implications for research on parenting stress. *Infant and Child Development*, 14, 211-225.
- 海老原亜弥・秦野悦子(2004). 保育園・幼稚園児を育てる母親の育児負担感—ストレス—, コーピング, ソーシャル・サポートの関係— 小児保健研究, 63, 660-666.
- 江上園子(2005). 幼児を持つ母親の「母性愛」信奉傾向と養育状況における感情制御不全 発達心理学研究, 16, 122-134.
- Gotlieb, L. N., & Mendelson, M. J. (1995). Mothers' moods and social support when a second child is born. *Maternal-Child Nursing Journal*, 23, 3-14.
- 柏木恵子(2001). 子どもという価値—少子化時代の女性の心理 東京: 中央公論新社
- 柏木恵子・若松素子(1994). 「親となる」ことによる人格発達: 生涯発達の視点から親を研究する試み 発達心理学研究, 5, 72-83.
- 木戸久美子・内山和美・北川真理子・林隆(2005). 学齢期にある子どもを持つ母親の育児支援に関する研究 山口県立大学看護学部紀要, 9, 31-39.
- 菊池知美(2008). 両親の幼稚園に対する期待の実態調査 人間文化創成科学論叢, 11, 269-276.

木村一絵・西内恭子・平野（小原）裕子・高田ゆり子（2006）. 母親の育児意識を構成する概念とそれに関連する要因 九州大学医学部保健学科紀要, 7, 69-76.

幸田早苗・城谷ゆかり（1998）. 幼児の主張的行動と母親の発達期待との関係－出生順位との関わりについて－ 北海道大学教育学部紀要, 76, 105-113.

Lam, D. (1999). Parenting stress and anger: the Hong Kong experience. Child and Family Social Work, 4, 337-346.

牧野カツコ（1988）. <育児不安>の概念とその影響要因についての再検討 家庭教育研究所紀要, 10, 23-31.

目良秋子・柏木恵子（2005） 育児期女性の生活・家族感情－学歴と就労との関連から－ 発達研究, 19, 113-124.

森下葉子（2006）. 父親になることによる発達とそれに関わる要因 発達心理学研究, 17, 182-192.

永久ひさ子（1995）. 専業主婦における子どもの位置と生活感情 母子研究, 16, 50-57.

内閣府大臣官房政府広報室（2007）. 男女共同参画社会に関する世論調査 東京：内閣府大臣官房政府広報室

内閣総理大臣官房広報室（1991）. 青少年と家庭に関する世論調査 東京：内閣総理大臣官房広報室

中嶋和夫・齋藤友介・岡田節子（1999）. 母親の育児負担感に関する尺度化 厚生指標, 46, 11-18.

中山まき子（1992）. 妊娠体験者の子どもを持つことにおける意識：子どもを<授かる>・<つくる>意識を中心に 発達心理学研究, 3, 51-62.

新田収・種子田綾・中嶋和夫（2004）. 学齢脳性麻痺児の発達の特性と母親のストレスの関係 総合リハビリテーション, 32, 1091-1095.

野口恭子・石井トク（2000）. 乳幼児をもつ母親の子どもに対する衝動的な感情と反応 小児保健研究, 59, 102-109.

野澤みつえ（1989）. 親業ストレスに関する基礎的研究 関西学院大学院年報, 15, 35-56.

労働政策研究・研修機構（2008）. 子育て後の女性の再就職：課題とその解決 東京：労働政策研究・研修機構

坂間伊津美（2000）. 乳幼児を持つ母親の心理的問題と疲労－阿見町調査から－ 茨城県立医療大学紀要, 5, 99-107.

嶋松陽子・高山知美（2004）. 双子を養育する母親の育児困難感とその要因 保健科学研究誌, 1, 35-42.

菅野幸恵・岡本依子・青木弥生・石川あゆち・亀井美弥子・川田学・東海林麗華・高橋千枝・八木下（川田）暁子（2009）. 母親は子どもへの不快感情をどのように説明するか：台1子誕生後2年間の縦断的研究から 発達心理学研究, 20, 74-85.

菅原ますみ・中野早苗（1998）. きょうだいの子育て－上の子と下の子でこんなに違う！ 東京：主婦の友社

都築千景・金川克子（2001）. 出産後から産後4か月までの子どもをもつ母親に生じた育児上の不安とその解消方法－第1子の母親と第2子以上の母親における比

較 日本地域看護学会誌, 3, 193-198.

山川玲子・柏木恵子（2004）. 母親の子ども・育児感情－虐待の温床としての育児不安の要因－ 文京学院大学研究紀要, 6, 185-200.

（受理年月日 2009年9月10日）

添付資料 配布した調査用紙

子育てに対する意識調査

この質問紙は、お子さんに対するお気持ちや 現在の生活に対するお考えをお尋ねしようとするものです。子どもとのかかわりのなかで経験される気持ちは、「かわいい」、「ほほえましい」、「誇らしい」といった肯定的なものばかりではなく、「イライラする」、「歯がゆい」、「がっかりする」といった、いわば「否定的感情」と呼ばれるものに圧倒されることも たびたびあるかと思えます。私たちは、子育て生活のなかでそうした気持ちを抱くことは、ごく自然なことで、多くの人たちに共通のものだという前提で、いらだち、怒り、落胆、不満といった気持ちの背景に何があるのか、それが子どもの成長・発達とともにどう変化していくのかを明らかにしたいと考えました。調査結果は、今後、地域の子育て支援などに役立てていきたいと考えておりますので、お忙しいなか誠に恐れ入りますが、趣旨を御理解のうえ、ご協力くださいますようお願い申し上げます。

記

- ・ 小学校のご厚意により、この調査用紙の配布をさせていただいておりますが、この調査は学校での活動とは一切関係ありません。したがって、この調査に協力しなくても、学校で不利益をこうむるというようなことは決してございません。
- ・ 回答は無記名です。どなたがどのような回答をなさったかは一切わかりません。
- ・ 原則としてお母様がお答え下さい。
- ・ どの質問についても、正しい答え、望ましい答えというようなものではありません。ご自分のお考えやお気持ちに沿って、ありのままをお答え下さい。
- ・ ご回答いただいた内容については、コンピュータに入力後、全体としての傾向を探るため、統計処理をいたします。したがって、お一人お一人の回答内容を個別に取り上げるというようなことはございません。また、質問紙はコンピュータへの入力を済ませたのちには、責任をもって処分いたします。
- ・ 調査結果については、後日、必ず皆様にご報告申し上げます。

お母さん、お父さんの年齢をお書き下さい。

お母さん () 歳 お父さん () 歳

いまご記入いただいている方はどなたですか？(原則としてお母様をご記入下さい)

お母さん ・ お父さん ・ それ以外の方 ()

家族構成についてお尋ねします。いっしょにお住まいの方全員に○をつけてください。

お母さん ・ お父さん ・ お子さん () 人 ・ 父方の祖父 ・ 父方の祖母 ・
母方の祖父 ・ 母方の祖母 ・ それ以外の方 ()

すべてのお子さんについてお尋ねします。

◎**第一子** 平成・昭和 () 年 () 月 生まれ (男・女)

幼稚園 ・ 保育園 ・ 小学校 () 年生 ・ 中学校 () 年生
その他 ()

◎**第二子** 平成・昭和 () 年 () 月 生まれ (男・女)

幼稚園 ・ 保育園 ・ 小学校 () 年生 ・ 中学校 () 年生
その他 ()

◎**第三子** 平成 () 年 () 月 生まれ (男・女)

幼稚園 ・ 保育園 ・ 小学校 () 年生 ・ 中学校 () 年生
その他 ()

◎**第四子** 平成 () 年 () 月 生まれ (男・女)

幼稚園 ・ 保育園 ・ 小学校 () 年生 ・ 中学校 () 年生
その他 ()

◎**第五子** 平成 () 年 () 月 生まれ (男・女)

幼稚園 ・ 保育園 ・ 小学校 () 年生 ・ 中学校 () 年生
その他 ()

女性の仕事についてのお考えをお尋ねします。現在のお気持ちに近いもの1つに○をつけて下さい。

女性は・・・

1. 仕事はずっと持たないほうがいい
2. 仕事は持つが、結婚したらやめるのがいい
3. 仕事は持つが、結婚して子どもが生まれたらやめるのがいい
4. 仕事は持つが、結婚して子どもが生まれたら一時やめて、子どもが大きくなったらまた仕を持つのがいい
5. 結婚して子どもが生まれても、ずっと仕事を続けるのがいい
6. 結婚しても子どもは持たず、ずっと仕事を続けるのがいい
7. 結婚しないで、ずっと仕事を続けるのがいい
8. その他（ ）

実際に結婚や出産をなさったとき、仕事（家業も含む）はどうなさいましたか？

1. 結婚して仕事をやめた（はじめから仕事はしていなかった）
2. 初めての子どもを出産する際に仕事をやめた
3. 二人目ないし三人目の子どもを出産する際に仕事をやめた
4. 一回仕事をやめたが、いま再開している（在宅の仕事を含む）
5. ずっと続けている（休職中を含む）
6. その他（ ）

いまお仕事をもちの方にお尋ねします。

次のうち、あてはまるもの1つに○をつけてください。

1. 外でフルタイムの仕事
2. 外でパートの仕事（週（ ）回、1日（ ）時間）
3. 在宅の仕事
4. 家でお店を営むなど自営業
5. その他（ ）

いまお仕事をもちでない方にお尋ねします。

現在、家庭以外の場で、個人としてやってみたいこと（仕事、趣味、ボランティアなど）がありますか？あなたの現在のお気持ちについて、最もあてはまるもの1つに○をつけて下さい。

1. 家事・育児に専念していて、それ以外に とくにしたいことはない
2. いくつかあるが、子育てのほうが大事だと思ってあきらめている
3. 今は育児や家庭を優先しているが、いずれは（たとえば、一番下の子どもが小学校に入学するなど）始めるつもりだ
4. これからやりたいことを見つけないと思っている
5. その他（ ）

お子さんに対していらだちや不満を感じたり、気が滅入るような思いをするのは、どういったときでしょうか。また、それはどうしてだと思いでしょうか？

次のページ以降には、お子さんに関係することがら（項目1～8）や お母様ご自身のさまざまな状況（項目9～15）が記されています。それぞれの文章と具体例をよく読んで、それらのことに対して、あるいはそれらの状況のときに、お子さんにいらだちや不満、気が滅入るといった感情を抱くことがどのくらいあるかをお答え下さい。

また、回答例にしたがい、「1. いつも」、「2. しばしば」、「3. たまに」のいずれかに○をつけた項目については、それがどうしてかをお考えいただき、あてはまるものに○をつけて下さい（複数でも可）。よくわからない場合は、「5. よくわからない」に○をつけてお答えください。

第○子のお子さんについてお尋ねします。

どのくらいあるか

1、2、3のいずれかに○を付けた場合、「どうしてか」にもお答え下さい。(複数可)

どうしてか

	1 いつも	2 しばしば	3 たまに	4 あまりない	5 全くない	1 そのお子さんの年齢としては、 ふさわしくないのでは、 ないのでは	2 男の子(女の子)らしく	3 一般的に望ましくないのでは、 気になるのでは	4 よその家の子どもと比較して	5 よくわからない
それぞれに対して、いらだちや不満、 気が滅入るなどの感情を抱くことがど のくらいあるか、どうしてか、をお答 え下さい。										
回答例 (いつも、しばしば、たまに に○を付けた場合)	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
回答例 (あまりない、全くない に○を付けた場合)	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
1. お子さんの性格にかかわることに対して。 例：神経質だ、こだわりが強い、頑固だ、落ち着きがない、 融通が利かないなど	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
2. お子さんが自分で自己管理（時間の管理や健康管理 管理）をしないことに対して。 例（時間の管理）：きまった時間に合わせて行動しない、早 起きしなくてはならない前の晩に夜ふかしするなど 例（健康管理）：外から帰ってきて手洗い、うがいをしな い、風邪をひいているのに水遊びするなど	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
3. あなたに対する態度に対して。 例：ため口をきく、反抗的に振舞う、口ごたえをする、生意 気な態度をする、すねる、嫉妬するなど	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
4. あなたの言ったことがお子さんに伝わらないこと に対して。 例：何度も説明してわかってくれたと思っていたのに、じつ はわかっていていなかったなど	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
5. お子さんの友達とのかかわりに対して。 例：自分の思っていることを友達に主張できない、友達の輪 に入れない、すぐけんかをするなど	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
6. 生活上のきまりや生活習慣のことで。 例：決められたことをしない、幼稚園や学校のしたくをしな い、きれいに食べられない、だらしない格好で外出するな ど	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
7. 行儀作法やマナーにかかわることで。 例：知っている人に会っても挨拶しない、よそのお宅で靴を そろえない、レストランやショッピングセンターのような 公共の場で騒ぐなど	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
8. 親に言われないと動かない、自主的に行動しない などのことに対して。 例：言われないと宿題をやらない、言われないと、いつまで も風呂に入らないなど	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5

引き続き、第○子のお子さんに対するいらだちや不満などについて、今度は、お母様ご自身が次のような状況のときに、どうであるかをお答え下さい。

	1 いつも	2 しばしば	3 たまに	4 あまりない	5 全くない
9. お母様ご自身の体調が良くないとき。 例：風邪をひいている、睡眠不足、疲れているなど	1	2	3	4	5
10. 別の用事で忙しいときなど、タイミングの悪い状況で、要求を出されたり、話しかけられたりすることに対して。 例：電話で人と話をしているとき、食事のしたくて忙しいとき、他のお子さんの世話をしているときなどに、何かやってほしいと言ってくる、家事がひと息ついて休もうと思ったところで、何か言ってくるなど	1	2	3	4	5
11. お母様ご自身に困ったことや悩みがあるとき。 例：仕事などで行き詰っているときなど	1	2	3	4	5
12. 予定していた段取りが狂わされることに対して。 例：子どもが寝たら自分の用事をしようと思っていたのに、思っていた時間に寝てくれず、自分のしたいことができない、ある時間に出かけようと思っていたのに、何か用事を頼まれて予定どおりに外出できないなど	1	2	3	4	5
13. 長時間、そばでいっしょにいるとき。 例：子どもが病気で一日じゅう家にいる、べたべたくっついてきて自分のそばを離れないなど	1	2	3	4	5
14. 夫や他の家族との関係がギクシャクしているとき。 例：夫とけんかしているときなど	1	2	3	4	5
15. そもそも、そのお子さんとウマが合わないことに対して。	1	2	3	4	5

ここから先の質問には、すべての方がお答え下さい。

次の文章を読んで、あなたのお気持ちに最も近いもの1つに○をつけて下さい。

	1 全くその通りである	2 どちらかといえばそうである	3 どちらともいえない	4 どちらかといえばそうでない	5 全くそうでない
私の家族の雰囲気がとても好きだ	1	2	3	4	5
私の些細な悩みや焦りについて夫はあまり理解してくれていないようで淋しい	1	2	3	4	5
私は仲間から受け入れられていると思う	1	2	3	4	5
夫といろいろなことを話し合えるのは楽しい	1	2	3	4	5
私は家族にとっても理解されていて幸せだ	1	2	3	4	5
夫とお互いにわかり合っている感じで安心だ	1	2	3	4	5
友達にとって私は必要な存在だ	1	2	3	4	5
近頃、夫の欠点が気になり腹が立つことが多い	1	2	3	4	5
夫が家事、子育てをあまり手伝わないのが不満だ	1	2	3	4	5
日常生活に打ち込めることがあり、満足だ	1	2	3	4	5
自分や家族の老後のことを考えると不安になる	1	2	3	4	5
社会から取り残されるようで不安だ	1	2	3	4	5
私はいまの自分が好きだ	1	2	3	4	5
毎日が同じことのくり返りで過ぎていくようで焦る	1	2	3	4	5
私には将来の具体的な目標がないので不安だ	1	2	3	4	5
社会から個人として認められないようで不満だ	1	2	3	4	5
私は結構いい母親だ、と思えて満足だ	1	2	3	4	5
毎日の生活が充実していてとても楽しい	1	2	3	4	5
自分の能力を不安に思うことがある	1	2	3	4	5
いまの私は一人前でないようで焦りを感じる	1	2	3	4	5
毎日の仕事にたいした意味を見出せないようで不満だ	1	2	3	4	5
やっていてとても楽しいとか、とても興味をもてるものがあまりなく、物足りなく感じる	1	2	3	4	5
将来が今までほど充実してはいないようで焦りを感じる	1	2	3	4	5
自分が必要とされているという満足感がある	1	2	3	4	5
今までの生き方、人生の選択を後悔するときがある	1	2	3	4	5
将来何かしたいが、その何かがわからなくて焦る	1	2	3	4	5

	1 全くその通りである	2 どちらかといえばそうである	3 どちらともいえない	4 どちらかといえばそうでない	5 全くそうでない
私は役に立っているという満足感がある	1	2	3	4	5
自分の生き方はこれでいいんだという実感がある	1	2	3	4	5
日ごろ、はりのある生活を送っているという実感がある	1	2	3	4	5
これから一生懸命にやっても、たいしたことはできないようで淋しい	1	2	3	4	5
いまのままの生き方でいいのかと近頃不安になる	1	2	3	4	5
子どもが離れていったあとの自分が不安だ	1	2	3	4	5

次の文章を読んで、あなたのお気持ちに最も近いもの1つに○をつけて下さい。

	1 いつもある	2 しばしばある	3 たまにある	4 あまりない	5 全くない
お子さんの世話のために、かなり自由が制限されていると感じることがありますか？	1	2	3	4	5
お子さんの世話が、自分で責任を負わなければならない家事等の仕事と比べて、重荷になっていると感じることがありますか？	1	2	3	4	5
お子さんがいるために、趣味や学習、その他の社会活動などに支障をきたしていると感じることがありますか？	1	2	3	4	5
お子さんのために、自分には望ましい私生活（プライバシー）がないと感じることがありますか？	1	2	3	4	5
お子さんとのかかわりで、気疲れを感じるがありますか？	1	2	3	4	5
お子さんとのかかわりで、腹を立てることがありますか？	1	2	3	4	5
お子さんとのかかわりの中で、われを忘れてしまうほど頭に血がのぼることがありますか？	1	2	3	4	5
あなたがお子さんにやっつけてあげていることで、報われないと感じるがありますか？	1	2	3	4	5
お子さんのやっていることで、どうしても理解に苦しむことがありますか？	1	2	3	4	5
お子さんとのかかわりに、イライラしたり気が滅入ったりすることがありますか？	1	2	3	4	5

次の文章を読んで、あなたの現在のお考えやお気持ちに最も近いもの1つに○をつけて下さい。

	1 全くその通りである	2 どちらかといえばそうである	3 どちらともいえない	4 どちらかといえばそうでない	5 全くそうでない
母親になることが、女性にとって存在のあかしとみなされる	1	2	3	4	5
子どものためなら、どんなことでもするつもりであるのが母親である	1	2	3	4	5
子どもを産む母親だからこそ、子育ては何にもさしおいて母親が行うべきことである	1	2	3	4	5
わが子のためなら、自分を犠牲にすることができるのが母親である	1	2	3	4	5
母親であれば、育児に専念することが第一である	1	2	3	4	5
育児は女性に向いている仕事であるから、するのが自然である	1	2	3	4	5
子どものためなら、たいていのことは我慢できるのが母親である	1	2	3	4	5
母親の愛情ほどに偉大で、気高く無条件なものはない	1	2	3	4	5
子どもを産んで育てるのは、社会に対する女性のつとめである	1	2	3	4	5
何といても子どもには生みの母親がいちばん良いのである	1	2	3	4	5
育児に専念したいというのが、女性の本音である	1	2	3	4	5
子どもが小さいうちは、母親は家庭にいて子どものそばにいてやるべきである	1	2	3	4	5

次の文章を読んで、あなたのお気持ちに最も近いもの1つに○をつけて下さい。

	1 全くその通りである	2 どちらかといえはそうである	3 どちらともいえない	4 どちらかといえはそうでない	5 全くそうでない
できるだけ学歴をつけてやるのは親の務めだと思う	1	2	3	4	5
子どものためにやってやれることは、親が多少犠牲になってもやってやりたい	1	2	3	4	5
自分ができなかったことを子どもにやらせてあげたい	1	2	3	4	5
子どもが横道にそれたりすることの責任は大部分が親にあると思う	1	2	3	4	5
子育ての責任を主に担っているのはやはり母親だと思う	1	2	3	4	5
自分の能力を生かすのも大事だが、いまは子どもの方により時間を使っ てあげたい	1	2	3	4	5

あなたがお子さんに対して、どのようであってほしいと願っていらっしゃるかをお尋ねします。次の文章を読んで、お子さんに対して強く期待することすべてに○をつけてください。いくつ○をつけていた
だいても結構です。

1. 挨拶、規則正しい食生活、整理・整頓などの基本的な生活習慣
2. 信念や勇気を持って行動する
3. 進んで地域活動、行事、社会奉仕活動などに参加する
4. ものごとを自分で考え、判断し、行動する
5. 自分の将来のことは、自分の意志で決める
6. 自分の言動に責任を持つ
7. ものごとをねばり強くやりぬく
8. なにごとも興味や関心を持ち、意欲的に取り組む
9. なにごとも冷静に対処する
10. 相手の意見や立場を理解し、尊重する
11. 家族や社会の一員であることを自覚する
12. 困ったときは、お互いに助け合う
13. ルールを守り、人に迷惑をかけない
14. 生命の尊さ
15. お金や物の大切さ
16. 言葉づかい、礼儀、作法、マナー
17. 人との出会いや人間関係を大切にす
18. 時間や約束を守る
19. お年寄りや身体の不自由な人に対し、思いやりやいたわりの心を持つ
20. 反省、感謝の気持ちを持つ
21. 目上の人や年長の人を敬う気持ち、謙虚な気持ちを持つ

最後に、差し支えなければ、以下の項目にお答え下さい。なお、下記の質問は、ご回答いただいた方々の全体としての分布を知るためのものです。これまでにお答えいただいた内容との関係をみようとするものではありません。

お父さんのご職業について、当てはまるものに○をつけて下さい。

1. 会社員 2. 公務員 3. 自営業 4. 農業、漁業、林業 5. 無職
6. その他（ ）

お母さんのご職業について、当てはまるものに○をつけて下さい。

1. 会社員 2. 公務員 3. 自営業 4. 農業、漁業、林業 5. 無職
6. その他（ ）

お母さんが最後に卒業された学校（各種学校を除く）をお答え下さい。

1. 中学校 2. 高等学校 3. 高等専門学校 4. 短期大学 5. 四年制大学
6. 大学院 7. その他（ ）

お父さんが最後に卒業された学校（各種学校を除く）をお答え下さい。

1. 中学校 2. 高等学校 3. 高等専門学校 4. 短期大学 5. 四年制大学
6. 大学院 7. その他（ ）

収入（共働きの場合は夫婦の合計）についてお尋ねします。お差支えなければボーナスなども含め、昨年1年間の収入をお答え下さい。

1. 200万円未満 2. 200万～400万円未満 3. 400万～600万円未満
4. 600～800万円未満 5. 800万～1000万円未満 6. 1000万～1200万円未満
7. 1200万～1500万円未満 8. 1500万～2000万円未満 9. 2000万円以上

以上で質問は終わりです。

お忙しいなか、たくさんの質問にお答えいただき、有難うございました。今後、貴重な資料として、子育て支援の具体策等に役立ていきたいと考えています。御協力に心より感謝申し上げます。

この質問紙に対してご意見やご感想があれば、ご記入ください。